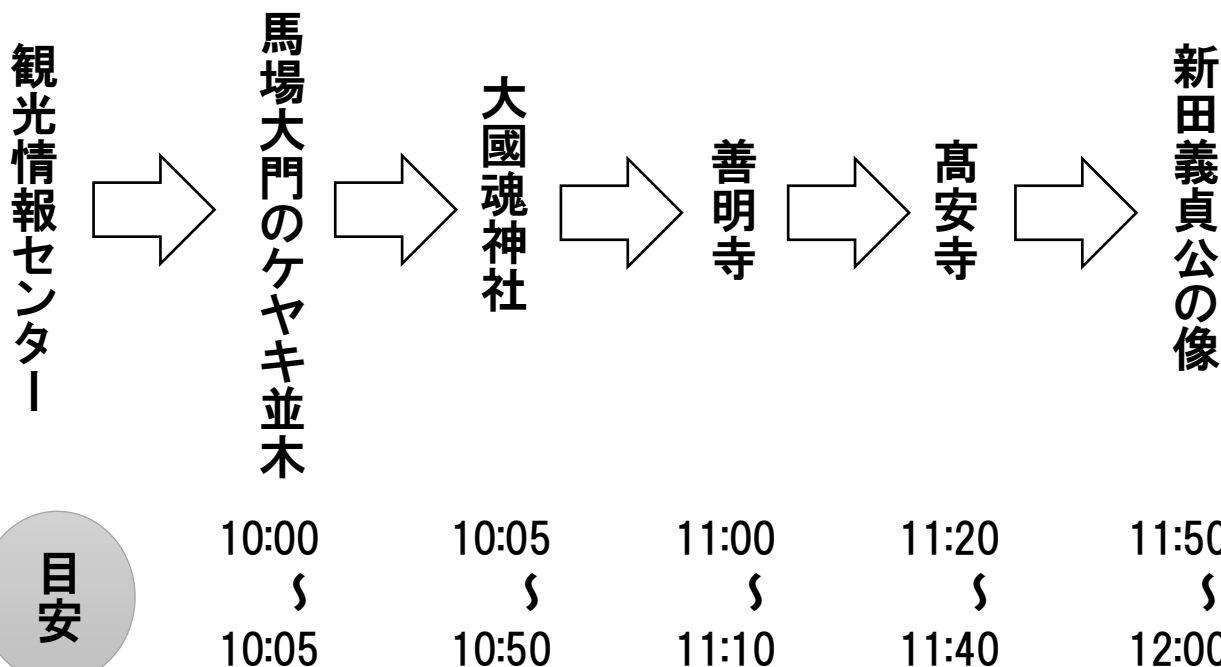


市内観光ミニツアーガイドマニュアル

府中ゆかりの武将を訪ねて

A 神社・仏閣コース



第一印象を大切に！

- ① 普段の体調管理で健康第一
- ② 笑顔で挨拶、笑顔で案内
- ③ 元気な声ではっきりと

緊急・事故時の対応

- ① 急病・怪我には、先ず応急処置を
- ② 病院、医師、ご家族への通報を
- ③ 第一報を観光情報センターへ

出発前の挨拶

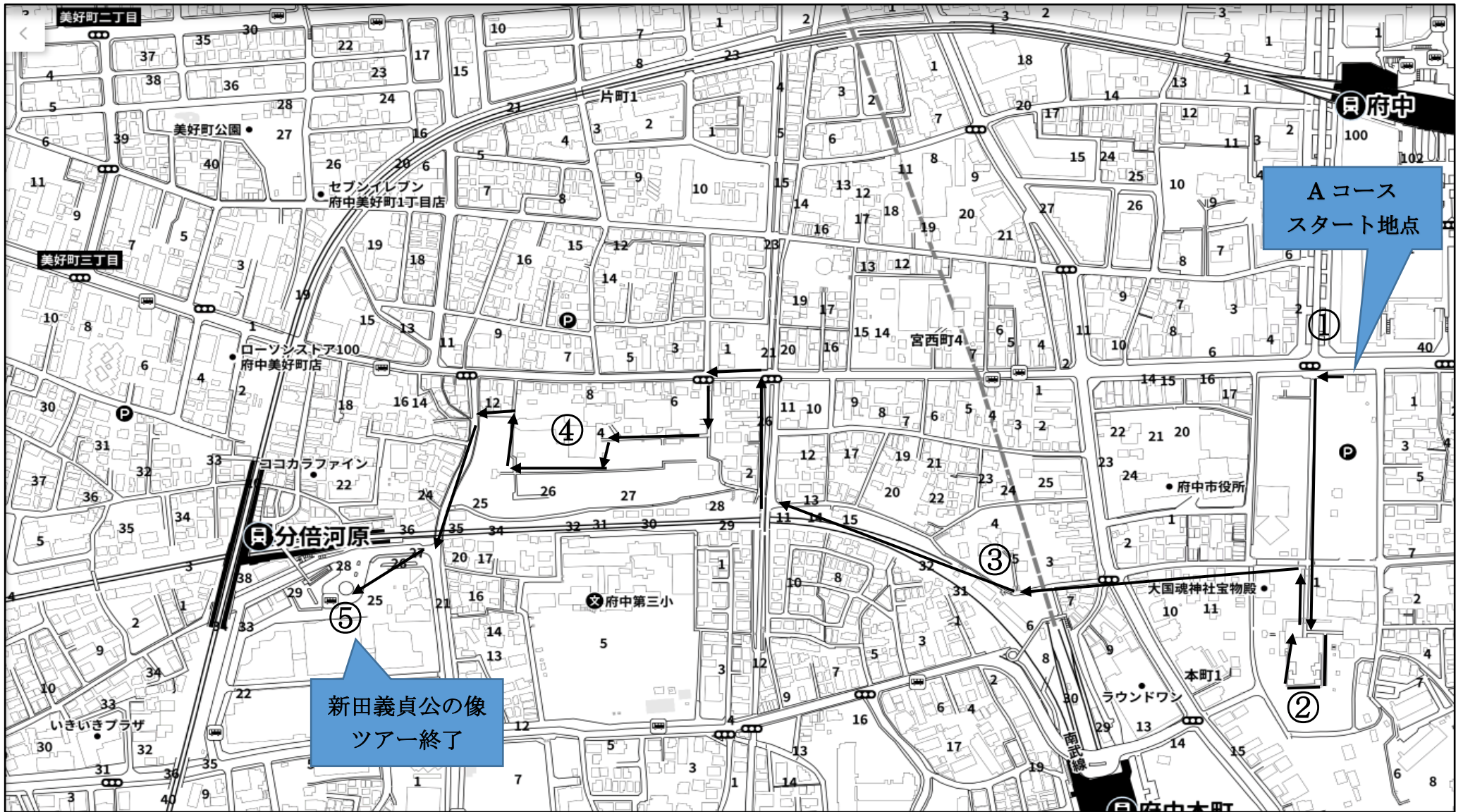
- ① 自己紹介
- ② コースの説明
- ③ 案内中のお願いと注意事項
 - ・夏場の水分補給、冬場のトイレ
 - ・建物側の通行と自転車の注意

解散方法について

- ① 解散後の個別の案内は行わない
- ② 参加者の帰りの交通手段を説明する
- ③ 解説チラシ、ミニツアーチラシを配布し、友人・知人へのミニツアー参加勧奨を依頼する
- ④ 観光情報センターに戻り「実施報告書」を提出する

A 府中ゆかりの武将を訪ねて 神社・仏閣 コース

NO	スポット	解説ポイント	備考
	観光情報センター (10:00) 出発		トイレ
1	馬場大門のケヤキ並木 (10:00～10:05)	<ul style="list-style-type: none"> ・大正13年(1924)国の天然記念物 ・ケヤキ並木の起源 ・詳細はDコースで説明(Dコース参加勸奨) 	
2	大國魂神社 (10:05～10:50)	<ul style="list-style-type: none"> ・大國魂神社の起源、武蔵総社六所宮 ・摂社、末社の説明、甲州古道、宝物殿・拝殿・本殿 ・本殿北向きについて、拝殿扁額、御神木(銀杏) 	七不思議やくらやみ祭はコースで! (終了後、トイレ・休憩)
3	善明寺 (11:00～11:10)	<ul style="list-style-type: none"> ・善明寺と依田伊織(墓所案内) ・鉄仏と畠山重忠伝説(11/3御開帳) 	
4	高安寺 (11:20～11:40)	<ul style="list-style-type: none"> ・高安寺の起源、足利尊氏再興 ・観音堂、山門、時の鐘、本堂等 ・秀郷稻荷、弁慶硯の井戸 	
5	新田義貞公の像 (11:50～12:00)	<ul style="list-style-type: none"> ・分倍河原の合戦、国分寺焼失 ・像の作者、大きさ、顔の向き等 ・分倍河原古戦場碑 	



Aコース
スタート地点

新田義貞公の像
ツアー終了

市内観光ミニツアー：
府中ゆかりの武将を訪ねて
A 神社・仏閣コース

①馬場大門のケヤキ並木、②大國魂神社、③善明寺、④高安寺、⑤新田義貞公の像

馬場大門のケヤキ並木

馬場大門のケヤキ並木は、旧甲州街道から北に約 5 4 0 m に及ぶ大國魂神社の参道であり、江戸時代には並木の北端^{ほくたん}(都立農業高校付近)に大國魂神社の木製の一の鳥居が建立されていた。

ケヤキ並木の起源は源頼義^{みなもとよりよし}・義家父子^{よしいえ}が奥州・安部氏の反乱「前九年の役」の戦いに向かう途中、大國魂神社に戦勝を祈願し、平定後の康平^{こうへい}5 年(1062)に勝利のお礼として神社に 1,000 本のケヤキの苗木を寄進したことが始まりと云われている。前九年の役は安部氏の反乱(奥州 1 2 年合戦とも呼ばれる)。

その後、ケヤキ並木は徳川家康が江戸に入国し、関ヶ原合戦や大阪の陣の戦勝を祈願し、その勝利を感謝して並木の両側に馬場を献納し土手を築き、それと同時にケヤキの苗木を補植したと伝わっている。現在のものはその時のケヤキ並木と云われている。大正 13 年(1924)には国の天然記念物に指定された。名木、巨樹が多い中、ケヤキ並木としては現在も国内唯一の天然記念物で保護されている。中には周囲 6m を超える古木も存在する。2024 年現在、ケヤキは 118 本。

(詳細はDコースで説明する)

大國魂神社

第 1 2 代景行天皇 41 年(111) 5 月 5 日創立と社伝にある。祭神は大國魂大神で、出雲大社の祭神(大国主大神)と同神である。昔、武蔵国を開発され、人民に衣食住の道を教えられ、医療法や、禁厭の術も授けられた。俗に福神、縁結びの神として著名なお方である。

武蔵総社六所宮

創建当初は武蔵国造が代々神社に奉仕したが、大化改新(645)により武蔵国の国府が府中に置かれたことにより国司が^{くにのみやつこ}国造に代わり奉仕するようになる。平安時代になり、国司が管内神社の祭祀を行う便宜上、各国府に総社と云うものが設けられた。武蔵国中の神社の祭神を国府内の一か所に合祀するようになりこれが武蔵総社と云われる起源である。

平安時代末頃(11 世紀末)国内著名な六社(一之宮：小野神社、二之宮：二宮神社、三之宮：氷川神社、四之宮：秩父神社、五之宮：金鑽神社、六之宮：杉山神社)を合祀した六所宮と云う神社が国府に設けられる。この六所宮と総社は本来別々のものであったようだが、武蔵国の場合には早くから合体して武蔵総社六所宮と併称されるようになる。以後大國魂神社は、中世、近世を通じて「武蔵総社六所宮」と呼称される。

鎌倉幕府、北条氏、足利氏も崇敬厚く、特に徳川家康は江戸入府以来崇敬厚く、天正 1 9 年(1591)には 5 0 0 石の社領を寄進している。その後も徳川家は特別の保護を加え慶長年間(1596～1614)には櫓並木に補植し、両側に馬場を寄進している。又慶長 1 1 年(1606)に社殿の造営をしている。現在の社殿は、正保 3 年(1646)10 月の大火に類焼したが四代将軍徳川家綱の命により時の老中久世大和守広之(下総関宿五万石城主)が復興奉行となり寛文 7 年(1667)再建された。本殿は三つの建物を横に連絡した相殿作りで、昭和 3 7 年(1962)東京都有形文化財に指定されている。鼓楼は嘉永 7 年(1854)の再建である。拝殿は明治 1 8 年(1885)再改築されたものである。

府中六所宮の初見史料としては「吾妻鏡」寿永元年(1182)8月11日の条、北条政子安産祈願(代参は葛西三郎清重)の記事に見られる。

社殿の北向きについては諸説ある。

源頼義・義家伝承。奥州安部一族の乱を鎮圧する祈願に来た時に本殿を北向きにした(前九年の役)。拝殿の注連縄、紙垂も左右反対となっている。

くらやみ祭

例大祭は、古代律令時代の「国府祭」を受け継ぎ、4月30日品川海上禊祓式、5月2日御鏡磨式、3日競馬式、4日御綱式、5日神輿渡御、6日早朝の還御の儀及び鎮座祭で終了する。奇祭「くらやみ祭」として有名である。

○大鳥居

御影石では日本最大級(重量95トン、高さ約10m、幅約7m)である。

○宮乃咩神社(主祭神 天鈿女命アマノウヅメノミコト)。境内摂社。

創立は大國魂神社と同じ1111年と伝えられる。

芸能の神、安産の神として崇敬されている。

例祭日は7月12日で、文治2年(1186)源頼朝が武蔵国中の神職に天下太平の祈願を行なうよう令して以来、毎年国中の神職が参会し終夜神楽を奏し祈祷が行われた。青袖・杉舞祭と言われる。今は国中の神職は参会していません。

また、頼朝の命により妻政子の安産を祈願したという伝えもある。

○相撲場

五穀豊穰と徳川家康の江戸入城の日を奉祝する八朔相撲祭が毎年8月1日に行われている。氏子有志による奉納相撲が行われている。

○手水舎

神社を参拝する際に、手や口を清める場所。現在のものは明治30年に建てられた。千鳥破風の屋根もさることながら、獅子や龍、獏や鳳凰の彫刻が見事。

2011年創立1900年祭事時に、現在の場所に移築された。

○随神門

創立1900年を記念して2011年に改築されました。旧随神門は武蔵国府八幡宮に移築されている。前の道は旧甲州街道が出来る前の道で甲州古道である。

○鶴石・亀石

二つの石は江戸時代の「江戸名所図会」にも書かれており、江戸時代にはあったものと思われる。鳥居の前身なのではと推測されている。現在は神社の「パワースポット」とも言われている。

○宝物殿

鎌倉時代の木彫の狛犬(国指定重要文化財)、8基の神輿、6張の大太鼓等多数の宝物が収蔵されている。開館日：土、日、祝日、神社祭礼日。

○鼓楼

太鼓を叩き時刻を知らせる建物である。慶長年間造営の際に、建てられましたが正保3年(1646)の大火で焼失し、嘉永7年(1854)再建されたものである。現在も朝8時と日没時に鳴らされる。

○本殿、拝殿

本殿は北向きの室町末期の建築様式である。現在の本殿は四代将軍家綱の命により寛文7年(1667)に再建されたもので、本殿は一棟三殿造りの珍しい構造形式である。拝殿には「総社六所宮」の扁額が飾られている。

- 水神社**(祭神 水波能売命ミズハノメノミコト、加茂別雷命カモワケイカヅチノミコト、玉依姫命タマヨリヒメノミコト、加茂建角身命カモタケツミノミコト)例祭12月16日。
創立は不明。かつては祠が御供所(現休憩所)の東側に鎮座し、本殿と同じく北を向いていた。昭和58年12月16日に境外末社滝神社より御霊分けをされ、平成17年に現在の場所に移設された。水神は身体健康、子孫繁栄等を司る神ともされている。この御神水は境内の井戸地下約120mより汲み上げたものである。
- 松尾神社**(祭神 大山咋命オオヤマクヰノミコト)例祭9月13日。
寛政12年(1800)に武蔵国の醸造家の懇請により京都の松尾大社より勧請されたものである。境内で例年「酒祭り」が行われている。
- 巽神社**(祭神 市杵嶋姫命イチキシマヒメノミコト)例祭4月1日。
創立は不明。享保の頃(18世紀)、市川にあった市神社が本殿の辰巳(南東)の方向に遷座された神社と云われている。花柳界の信仰が厚い。
- 大銀杏**(大國魂神社の御神木、府中名木百選)
大國魂神社境内樹木の一部は、昭和36年12月15日に府中市天然記念物に指定されている。中でもこの大銀杏は、幹の周囲9.1m、樹高23.0mの巨木で、東京都では港区の善福寺のイチョウに次ぐものである。大國魂神社の七不思議の一つにも数えられている。
- 神馬舎**(しんめしゃ)
神馬舎は、神様の乗り物である馬(多くは白馬)を納めたところである。神馬は、実際に生きている馬を奉納する所もあるが、その後、土製の馬形、木製の馬形、馬の形の板となり、そして、板に馬の絵を描いた絵馬へと変化して行ったといわれている。大國魂神社の神馬舎には、現在、木製の白馬が納められている。
- 東照宮**(祭神 徳川家康);例祭6月1日
元和4年(1618)秀忠の命により造営されたものである。府中御殿は家康が鷹狩等での縁深く、家康死去翌年に久能山から日光に霊輿が遷された元和3年(1617)3月21、22日府中に逗留し、宮司が祭祀を務めた事によるものと云われている。
- 住吉神社**(祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命)例祭10月1日。
大阪府住吉の住吉大社の御分霊を祀っている。
海上守護の神、除災招福の神として崇敬されている。
- 大鷲神社**(祭神 大鷲大神)例祭11月酉の日
大阪府堺の大鳥大社の御分霊を祀る。もとは武運を守護されたが、現在は開運の神、商売繁盛の神として信仰が厚い。毎年11月の酉の日に「酉の市」がひらかれ熊手の頒布がある。(関東三大酉の市の一つ、浅草の鷲神社と新宿の花園神社)

善明寺

悲願山円養院善明寺と云う。天台宗。開山、開基とも不詳。

本尊は阿弥陀如来坐像。毗尼苑びにえんに安置されている。

江戸中期までは馬場大門のケヤキ並木西側の番場神戸(現宮西町)にあり、安養寺の末寺で朱印十石六斗余を有する古刹であった。

依田伊織は天和元年(1681年)本町 五十嵐家の九人兄弟の末子として生まれる。神

学者「依田伊織」(井田是政の玄孫)が両親の菩提を弔うため、延享元年(1744)祖先の館跡(伊織屋敷)を提供し、お寺を移し造営を加え、財を寄進し中興開基した。(五十嵐は母方だったが後に依田と改めた)

依田伊織は神学、儒学、仏教学を修め、江戸では高名な学者であった。三教一致を説いた大成教(神道)を信奉し、その研究と普及に努めた。聖徳太子の親撰しんせんとされる

「先代旧事本紀」を研究し、明和元年(1764年)江戸、谷中で没し、享年84歳。ここ善明寺に帰葬された。「先代旧事本紀」は、鎌倉時代から神道関係者の間で、「古事記」「日本書紀」と並び尊重された歴史書である、

西園寺実満(公家の出身)は、天保14年(1843年)京都に生まれ、勤王の志士として国事に奔走し、文久3年(1863年)尊攘派公家を総師とし、農兵を組織し、但馬生野に挙兵したが敗走。戊辰戦争では新政府軍に加わり、維新後、太政官に出仕するが国学、漢学、詩歌、書にも長じており、神田一ツ橋に「温和学堂」を開き、多くの門弟を教育した。姪が当寺住職に嫁いだのを知り、晩年は善明寺に住み、大正7年(1918年)76歳に没す。墓地にある依田伊織や勤王の志士西園寺実満の墓所は東京都の旧跡に指定されている。

宝篋印塔ほうきょういんとうは、六所宮むくろみやの社家鹿嶋田和泉正いづみまさつね常の子として生まれ、東叡山(寛永寺)の絵所(所属の絵師)となり活躍した関良雪が安永4年(1775)次の5人の恩人の菩提を弔うために建立したと伝わる。

普照了月和尚(画の師)、徧無為解脱居士(依田貞鎮)、松溪院皈覚澄真社士(父)、伴松院覚珠芳善信女(母)、不失淨因禅尼(妻)

金仏殿には、鉄製鑄造の「鉄造阿弥陀如来坐像」と「鉄造阿弥陀如来立像」が安置されている。鉄製鑄造の仏像は全国的でも珍しく、90点程しか存在しない。又、東日本くろがねやとにその大部分が分布している。鉄仏坐像には、建長5年(1253)国分寺黒鉄谷戸の刀鍛冶、藤原助近の銘がある。

● 鉄造阿弥陀坐像(大鉄仏)は、像高178cm・重量380kg・鎌倉時代の年号が記されており、もと国分寺付近にあったとされ、江戸時代には大國魂神社で祀られ、明治の神仏分離令で善明寺に移された。

● 鉄造阿弥陀立像(小鉄仏)は、像高100cm・重さ60kg・長野の善光寺の様式の阿弥陀如来様、もと大國魂神社近くの淨照寺じょうしょうじの本尊だったと言われる。大鉄仏とともに明治以降、善明寺に祀られる。

いずれも大正2年(1913)国の重要文化財に指定されている。

(毎年11月3日に一般公開されている)

阿弥陀如来立像には、^{はたけやましげただ}畠山重忠（1164～1205）と恋ヶ窪の遊女^{ゆうじょあさづまたゆう}夙妻太夫との悲しい伝説が残されている。

重忠は宿場町恋ヶ窪の遊女夙妻太夫を気に入り、恋仲になったが、平家追討のため、西国に旅立った。夙妻太夫に横恋慕する男が重忠の事を諦めさせるため、重忠が討ち死にしたと嘘を付いたところ、悲しんだ夙妻は遊女街の近くの姿見池に身を投じた。二人の仲を妬んだ男の虚言を信じ、入水した夙妻太夫の菩提を弔い畠山重忠が^{はいたい}鑄造させ、道明寺を建立し安置した。しかし重忠戦死後、この寺も^{はいたい}廃頽し、立像も風雨に晒されるようになったので、時宗の僧、^{みょうれん}明蓮と^{ふじわらすけちか}藤原助近が、一丈二尺の坐像を鑄造して胎内に納めたとの伝承である。

しかし、その後の研究により、二つの仏像は別々に作られたものであり、胎内仏ではないようである。

畠山重忠

平安末期から鎌倉時代初期の武将、鎌倉幕府の有力御家人、源頼朝の挙兵に際して当^{しんじゅう}初は敵対するが、のちに臣従して治承・寿永の乱で活躍、^{ちゅうけんび}知勇兼備の武将として常に先陣を務め、幕府創業の功臣として重きをなした。

高安寺

曹洞宗の古刹で、龍門山等持院高安寺と称す。本尊は釈迦牟尼仏である。寺伝によれば古くは、昔、藤原秀郷が武蔵国守の時の館跡が寺となり、市川山見性寺（真言宗か）と呼ばれた。本堂裏に「秀郷稻荷神社」が祀られているのがその証である。

元弘3年(1333)の合戦後、南北朝の動乱は続き、治世は定まらなかった。足利尊氏は、臨濟宗の高僧、夢窓疎石に師事し修養し、鎮護国家と衆生救済を祈って、全国に安国寺・利生塔を建立しようと発願した。この時市川山見性寺が武蔵国安国寺として改められ、安国・利生の祈願所として「龍門山高安護国禅寺」と呼ばれて再興された。

開山は貞和4年（1348）頃、臨濟宗建長寺末寺として大伽藍を整え、末寺70有余を擁し、広大な寺領は、東は代田村（世田谷区）西は貝坂（立川市）南は向山（川崎市）北は山口（所沢市）に及び四方およそ四里を有していたという。

高安寺の本堂正面にある「等持院」の扁額は、開基となった尊氏の法嗣名であり、寺紋も足利氏の紋章⊖（丸に二つ引両）を用いている。尊氏とは、建武の中興による功勞で天皇の御名の一字を拝領して改名したもので、本来は足利高氏であって、その名の一字をあてて、高安寺としたと推測されている。

高安寺はしばしば足利將軍家の陣所となったが足利氏の衰えとともに衰退していった。その後、青梅の天江東岳和尚が慶長年間（1596～1615）に再中興し、曹洞宗の禅林に改め、海禅寺を本寺とした。

徳川時代に入り徳川將軍家から御朱印15石を拝領し、府中初代代官、高林吉利の庇護を受けた

総門は1750年頃の建立で支那竺庵和尚による「武野禅林」の扁額が掲げられている。

観音堂は元和6年(1620)の洪水で現在の場所に流され、享保元年(1716)建立されたものである。その後、享保11年(1726)に観音会が開かれ、信者と寺とを結ぶ信仰上の接点として今日までつながっている。縁日は毎月18日。

鐘楼・山門は明治5年(1872)に二十六世哲苗和尚が完成させ、昭和53年に檀信徒会館の「利生閣」が完成し、完工したものです。(高安寺パンフレットの説明)

山門は十字路になった特殊な構造をし、迦陵頻伽の木鼻が飾られ、楼上に釈迦如来像、四天王像が祀られ、天女の天井画がある。山門の仁王尊は国立市の関頑亭氏によるものです。「奪衣婆」「地藏尊」が付属している。

鐘は徳川幕府から「時の鐘」に指定され、今でも朝、昼、夕と三度時を報じている。現在の鐘は安政3年(1856)に改鑄したものである。

本堂は寛永元年(1624)の火災で焼失し、およそ10年後本堂が再建された。現在の本堂は享和元年(1801)の2度目の大火で焼失したものを享和3年(1803)再建されたものである。正面には「等持院」の扁額がある。本堂内陣の天上には相沢五流の筆による獅子と花鳥図25枚があり、下で手を打つと響鳴し、「鳴き龍」と呼ばれている。本堂内には、非公開の藤原秀郷公と足利尊氏公の像が安置されている。秀郷公の像は、毎年2月の初午の日に秀郷稻荷神社でご開帳される。

寺宝として後北条氏免税朱印状二通がある。弘治3年(1557)北条氏康が高安寺保護の為、戸数制税を免除した指令書で虎の姿を彫り込んだ朱印が押されていることから「虎の御朱印状」と呼ばれている。残る一通はその子氏照が追認した「象印判状」である。

「弁慶硯の井戸」

本堂裏には、兄頼朝の怒りを買って鎌倉に入ることを許されなかつた義経、弁慶主従が、赦免嘆願の大般若経を写経する為、硯の水を汲んだと云う「弁慶硯の井戸」がある。

墓石

府中宿の「四人部屋」と云う旅籠屋を営んでいた野村瓜州の墓石がある。瓜州は文人墨客との交友も広く特に、太田蜀山人との親交深く瓜州の墓石には墓誌と撰文を残している。

木曾源太郎義顕の大きな墓石がある。肥後細川藩の兵法師範で、国学を学び、文久3年(1863)但馬生野の変に尊王公家沢宣喜の参議として軍中総指揮をとるも敗れる。晩年は長女多賀子の嫁ぎ先府中古瀬家に隠棲し、大正7年(1918)80歳で病没。碑文によれば木曾義仲25代目の子孫とある。

府中初代代官の高林吉利、吉次父子の墓石がある。

分倍河原の合戦

鎌倉時代末期、多くの御家人は元寇（蒙古襲来）で十分な恩賞が得られない等で窮乏に苦しみ、幕府への不信、不満が募っていった。

元弘3年(1333)5月8日、新田義貞は、上野国新田庄、生品明神社前に討幕の兵を挙げた。同日、東山道を西進し、上野国国衙に圧力をかけ翌9日には武蔵国に入る。新田義貞の挙兵を知った幕府は、金沢貞将の軍5万騎を下川辺に、桜田国貞の軍6万騎を入間川(狭山市)に差し向け迎撃の陣を張る。

5月11日小手指河原(所沢市)に両軍激突。勝敗つかず、新田軍は入間川に、幕府軍は久米川(東村山氏)に退陣した。義貞挙兵に4日遅れて5月12日下野国で足利千寿王(後の足利二代将軍義詮)が挙兵し、新田軍を追う。僅か4歳。

5月12日未明、先手を打って新田軍は久米川を攻めると幕府軍は分倍河原に退却。戦況不利を聞いた北条高時は、分倍河原に、弟泰家の軍10万の援軍を下す。13日14日と両軍兵を休める。

5月15日未明、泰家の援軍を知らない新田軍は分倍河原を急襲するも大敗し、堀兼(狭山市)まで敗走する。(この時、国分寺が焼失したと云われる)

ところがこの夜、相模国、三浦大多和義勝が6千余騎を引連れ新田軍に寝返る。

5月16日早朝、新田軍は分倍河原を急襲する。前日の戦勝に油断していた幕府軍は敗れ、泰家以下鎌倉に逃れるが、新田軍の追撃厳しく。

5月22日、北条高時以下一門、葛西谷、東勝寺にて自刃。鎌倉幕府は滅亡する。

この戦いで興味深いのは、久米川戦での幕府軍の敗走先、及び泰家の援軍派遣先が何れも府中分倍河原であったと云う事実である。

分倍河原の地は、六所宮から西に約1.5km離れた周縁部にあたる。鎌倉街道上道が通っており、宿として町場が既に形成されていたと推察される。

「武蔵国留守所連署書状」には「府内分倍」と記されており、府中の領域内であったことが分かる。又、府中には国内の軍事指揮権を有する国衙があり、分倍は、幕府にとって軍の再構築を図る軍事拠点であった。分倍河原合戦は、国衙と分倍と云う政治的、軍事的な拠点、更に多摩川と云う防衛ラインをめぐる争奪戦と云う性格を持った戦いであったと云うことが出来る。

更にこの合戦に江戸(城南)豊島(城北)葛西(城東)の三氏及び河越氏(武蔵検校職を歴任)が参戦したこと。これら武蔵四豪族は幕府直轄下の武蔵四大勢力であり、これらが鎌倉幕府を見放したとき、それは、相模国三浦一族の反幕府の動きと共に幕府滅亡を意味する十分な現象であったと云える。

新田義貞公の像は昭和63年(1988)分倍河原古戦場跡に府中市が富永直樹氏(芸術院会員)に依頼し建立したものである。4m×4m、重さ3トン(台座除き)鎌倉を向いている。

分倍河原古戦場碑は昭和10年(1935)建武の新政600年を記念して新田川緑道に建立されている。新田氏の子孫で元男爵新田義美の筆により建立。

新田義貞挙兵の大義については学者の間に諸説あり、未だ確定していない。